

## 類似句のこと

柴田白葉女

書こうとするにあたって、まず『現代俳句大辞典』（昭55 明治書院刊）のなかの「類句」の項をみた。この項は岡田日郎氏が担当して執筆していただけるが、その必要な点を、そのまま書きうつしてみると、

△……俳句結社という類想思考集団から類句が生れるのは当然のことであり、そうした場合、無意識の類句でもあとからの作は取消す必要があり、意識的な類句は作者にとっては恥とすべきことである。どのへんまでを類句とするかそれは今後の俳壇に課せられた極めて重要な課題であると考えられる。▽

である。ところでこれは、この以前『俳句』の別冊『俳句辞典』（昭52・9 臨時増刊）にも、岡田氏が担当しておられて全く同じ解説である。おそらくこのほうが元であろうと思われる。ただこれには類句として例句があげられてある。

月光の及ぶ限りの蕎麦の花 有風  
月光の及ぶ限りの蕎麦の花 白葉女

そして、この二句は△類句であるかどうか読者の判断を待ちたい▽

迎えたいと稲葉松影女さんと一緒に見えられたとき、「実は」と釈明されたのであるが、「朝」五十八年四月号の巻頭に主宰岡本陣氏の選で五句とりあげられている中の三句目に、

春の星一つ潤みて皆うるむ 丈

があり、同年二月十九日に母上が逝かれたおりの作で、二月末に「朝」へ投句されたとのことである。ところが、五十八年七月号の『俳句』に私の蛇笏賞受賞作品『月の笛』よりの抜粋五〇句のつたが、それを見てびっくりされたのだといわれたのである。

私のは昭和五十七年四月の『俳句』に「特集現代女流俳人の世界」で句を発表した六人の女流の中に、「春の星」の題で掲載された二三句のなかの一句である。自分でもその句は気に入っていて『月の笛』の中にとり入れたのであった。

春の星ひとつ潤めばみなるむ 白葉女

と、多少のニュアンスはちがうものの類似していることは否めな

い。青山氏は誠実な、そして潔癖な人柄で、他人の句をまねたりする人ではないし、「雲母」でながく勉強していられたときから似たような句を作っても不思議ではない。それにこの句自体が、特別かわった内容でもないし、表現もかわってはいないから、類似句があっても当然だという気がしないでもない。

私は人並みの頭脳と情緒を持った人間だと思っているし、平明な句が好きだから、考えなければわからないような句は作れないし、作ろうとも思わない。ただそのときの感懐を、いのちのつ

とことばが添えてある。

この私の「蕎麦の花」の句は、昭和四十八年刊の句集『冬泉』にある句である。そのころ仲間たちと高峯高原へ吟行し、一泊して、

秋冷の山 氣にひらく掌  
雲霧のかなた我家もともすころ

などの句とともに作った句であり、実景であった。月光の中の白い蕎麦畑をうつくしいと思ったのである。佐々木有風氏はそのころは、満洲から引き揚げて来られ、草樹会に私を入れてくれたり、主宰誌「雲」（現在、高弟であった野口根水草氏継承）の会合に招いてくれたりもし、私も親しく兄事して、有風氏の句を誦みはしたであろうが、おぼえてはいなかった。それでもあたまの片隅にあったのであろうと決めつけられれば、なんともいえないが、意識してのことでないことはいうまでもない。これをみたときのショックはいまも忘れ得ない。けれどもすでに活字になってしまったことでもあり、ここでないを言っても仕方がないと思い、だまって刻を流してしまった。私のほ、

月光のおよぶかぎりの蕎麦の花

で仮名が多いが、やはり類似句ではある。「意識的な類句は作者にとっては恥とすべきことである」ということには、いつまでもひっかかっていて、どこかで誰かに釈明したいと思いつつ今日に到ってしまった。

ところが最近同じようなケースがおこった。「朝」の巻頭級の作家である青山丈氏が、昨春秋、足立区俳連の秋の大会に私を選者に

ぶやきをすなおにうつくく句の形にしたいと思っている。それゆえ極言すれば、類想があろうが、類句があろうがおかまいなしの心境である。しかも経験の範囲がせまく、好みもきまっているから、同じような句ばかりできる。自作のものは類想類句だらけである。自分でも同じような句ばかり作っているやになることもないではないが、もちろん問題になるのは他人の句であるから、自作の場合は自分で解決すればよいが、選者として他人の句に立ちむかうとき、おそらく誰もが類想・類似句になやまされるにちがいない。ことに自分の好みがきまっているから、好みの句に出あったとき、よほど注意しなければいけない。でも私はわりあい楽観的に考えている。これだけ多くの人間がいて、ずいぶん似通った人があってもともかく区別がつくのだから、句にしても先にあげた例でもわかるように「一字一言」がわなないということにはすくないのではないかと思う。

要は、俳句は創作である。自分のものであるということをつねに忘れないようにしなければならぬと思う。自分が自分の眼で観、ここで感じたことを句の形にして表現するのであるから、根本はあくまで自分である。最初は指導してもらい、添削してもらってもやがて努力してゆくうちに自分のものを見出さなければならぬ。その努力の過程に句作の醍醐味もあるものである。賞をめぐってしたり讃められることを求めたりしても、いい作品は生まれにくい。俳句は自分自身が作るものである。自分の貴い創作品であるということとを忘れないようにすれば、類想・類句おそるるに足らずであると思ふが、どうであらうか。